

35 B-RTOの止血効果に対するリスク因子解析

渡邊 雄介・盛田 景介・林 和直
兼藤 努・上村 博輝・横尾 健
上村 顕也・土屋 淳紀・高村 昌昭
川合 弘一・山際 訓・須田 剛士
鈴木 健司・野本 実・寺井 崇二

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野

【緒言】本年度、当院の静脈瘤破裂2症例でB-RTOによって治療を完遂できなかった。原因について過去10年分の症例でB-RTOの止血効果に対するリスク因子解析を行った。

【方法】2006～2015年にB-RTOを行った36例を対象に背景肝・B-RTOの目的・性別・Child-Pugh分類・静脈瘤破裂の有無・HCCの有無・B-RTOの成否・一時止血の成否・一時止血の方法・年齢・WBC・Hb・Pltについて検討した。さらに緊急B-RTOを行った15例で解析を行った。

【結果】B-RTOの成否に対して、一時止血の成否は有意差を認めた。B-RTOの成否に対して、静脈瘤の局在と一時止血の方法は有意差を認めなかった。

【結論】静脈瘤破裂症例の場合は一時止血をした方がBRTO成功率は高い。静脈瘤破裂時の止血方法はBRTO成功に関連しない。十二指腸静脈瘤破裂の場合BRTOを失敗する傾向にある。以上から静脈瘤破裂症例でBRTOを考慮する場合は、方法を問わず一時止血を成功させることが重要である。

36 効率的なDrug-eluting beadsの調整法

横尾 健・兼藤 努・須田 剛士
上村 博輝・上村 顕也・土屋 淳紀
高村 昌昭・川合 弘一・山際 訓
野本 実・寺井 崇二

新潟大学医歯学総合病院
消化器内科

【背景】Drug-eluting beadsはゼラチンスポンジやヨード化ケン油脂肪酸エチルエステルとは

薬剤特性が異なる。抗癌剤のローディングに時間がかかり、懸濁状態維持のため注入時にシリンジの振盪を要するなど煩雑である。しかし、懸濁を維持し適切な濃度を保って注入することは、beadsを末梢動脈まで到達させ塞栓効果を高めるために不可欠である。我々は、ディーシービーズ(DCB)を用いて、ローディング時間を短縮し、DCBの懸濁状態を維持するための調整法を検討した。

【方法】2mlの生理食塩水(NS)、蒸留水(DW)に溶いたエピルピシン(Epi)50mgを、リン酸緩衝液を除いたDCB(100-300um)2mlと混和し、NS群、DW群とした。DCBを6mlのDWで洗浄後にDWに溶いたEpiを加えた群をDW-DW群とした。これら3群において上清のEpi濃度を吸光度計(495nm)を用いて経時的に測定した。測定と測定の間はタッピングによりDCBを攪拌した。DW群ではタッピングを行わず静置した状態での測定も追加した。次にEpiをローディングしたDCB500ulを希釈造影剤で約40倍として懸濁状態を評価した。希釈造影剤は、イオパミロン300(IOP)とNSで作成し、10:10, 9:10, 8:10, 7:10, 6:10の割合とした。

【結果】EpiのローディングはDW-DW群、DW群、NS群の順に早く、3群とも5分以内に99%が吸着された。一方、タッピングを行わないDW群は25分で91.5%の吸着であった。8:10の場合には少なくとも5分間、懸濁状態が維持された。

【考察】DCBとEpiの結合は、それぞれのプラス、マイナス荷電により成されるため、競合するプラス荷電の少ないDW-DW群でローディング時間が最も短縮されたが、十分な攪拌がより重要であり、作業手順を考慮すると、DW群の調整法が効率的と考えられた。IOP: NS = 8:10の希釈造影剤に懸濁した場合にDCBの良好な懸濁が得られ、一定濃度での注入に貢献すると考えられた。